# 米国における正規学校外教育の事例検討
## －集団活動の位置づけとその役割に注目して－

森田　司郎*

# A Case Study about Alternative Schools in Philadelphia

MORITA Shiro *

**Abstract**

The purpose of this article is to describe how Alternative Schools are using Group Activities in their curriculum. In this article, the curriculum of two Alternative Schools; One Bright Ray Community High School (OBR) and Youth Build Philly Charter School (PYB) are examined. Information about how these schools are utilizing Group Activities to make students focus to their own goals, to give student sufficient self-efficacy, and to give students sufficient sense of belonging to their schools and their fellows. Some comments for improving out of school settings for children in Japan are made.

キーワード：学校外教育、Alternative Schools、集団活動、米国、フィラデルフィア市

## １．問題の設定

本稿の目的は、正規学校外の教育における集団活動の位置づけとその役割を明らかにすることである。このために、多様な学校外教育の実践が行われている米国の事例を検討し、そこで集団活動が重要な役割を果たしていることを示す。

### 学校外教育への注目と集団活動の重要性

2015（平成27）年に、フリースクール等の学校外での教育機関の実態について、文部科学省が行った調査結果が公表された[1)]。また、教育委員会と企業・NPO 等との連携・協働に関する調査も文部科学省によって行われている[2)]。これまで、日本では学校外の教育に対して十分な関心がもたれることは少なかった。しかし、不登校児童生徒が一定数を推移し、いじめ問題への対応やキャリア教育の推進など、従来の学校教育が単体で対応することが難しい課題が増えている。そこで、学校は、学校の外で行われている様々な教育活動に目を向け、連携を進めていくことが必要となってきている。フリースクール等の実

＊　非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

態や、企業・NPO 等との連携に関する文部科学省の調査は、このような関心に基づくものとして捉えることができる。

それでは、日本の学校外教育ではどのような教育活動が行われているのだろうか。その実態を端的に述べれば、定まった形式はなく、それぞれ対象とする子どもに合わせた教育活動が行われている場合が多い。このことは、文部科学省によるフリースクール等の調査結果でも示されている。もちろん、学校外教育の多様性、柔軟性を尊重する観点に立てば、教育活動の共通の枠は不要かもしれない。しかし、学校外教育が一定の存在意義を確立するためには、そこでの学習経験が子どもたちのその後、すなわち学校や社会での生活につながる道筋を示す必要があるとも考えられる。

そこで、本稿では、学校や社会との接続を見通した学校外教育のカリキュラムを編成する際に、どのような視点が必要となるのかという点を明らかにしようとする。この問いに答えるために、学校外教育における集団活動に注目したい。なぜならば、集団活動は、学校カリキュラムの基底をなす学習活動の原理である。また、学校外教育で学習した子どもたちが次のステップ（正規の学校に戻ることや実社会に進むこと）で生活していくうえで、集団活動への慣れは重要であるからである。このように、集団活動をどのようにカリキュラムに取り込むのかという点は、学校教育のみでなく、学校外教育のカリキュラム編成においても重要な視点である。

### 研究の対象と課題設定

すでに述べたように、日本での学校外教育は様々な形態で行われている。その教育活動の内容も定式化はしていない。したがって、本稿では学校外教育の活動が一定の歴史をもち、その制度が日本に比べて整備されている米国の学校外教育の事例を検討する。ここでは特に、米国フィラデルフィア市における学校外教育の２つの事例を対象とする。そして、そこでの学習において集団活動がどのように活用され、どのような役割を果たしているのかという点に注目して検討する。これらの事例を検討することで、日本の学校外教育のカリキュラム編成に必要な視点を導き出すために有用な情報を得ることができると考える。

以上の問題意識にもとづいて、本稿では次の３つの課題を設定する。

１．米国の学校外教育においては、集団活動がカリキュラムの中に位置づけられているのか。

２．米国の学校外教育における集団活動は、どのような役割を果たしているのか。

３．日本の学校外教育のカリキュラム編成において、集団活動を取り入れることがどのような利益をもたらすのか。

## ２．米国の学校外教育の事例検討

ここでは、米国フィラデルフィア市内における学校外教育施設（Alternative School、“代替の学校”という意味）の２つの事例を検討する。フィラデルフィア市では、米国の中でも特に学校外教育が盛んに行われている。近年、子どもの深刻な学力低下が問題となり、その対策の一環として学校外教育の充実を含めた教育改革が進められているという特徴をもつ。いっぽうで、不登校や薬物や暴力等に関する問題行動を起こしたりして正規の学校（traditional public schools）を退学（drop out）となる子どもたちの問題は、依然として深刻である[3)]。本稿では、フィラデルフィア市内で比較的安定して活動を継続している民間の学校外教育施設の２つの事例を検討の対象とする。米国において Alternative School は、正規の学校の代わりとなる「学校」として正式に位置づけられているものも

多い。ここに通う多くの子どもたちは様々な事情で正規の学校には通うことができない。こうした子どもたちの受け皿として教育機会を提供する機能を果たしている。この制度に類似したものは、現在の日本においては十分に確立されていない。あえてAlternative Schoolを日本の現状に置き換えれば、フリースクールや高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学試験検定）のためのサポート校等ということになろう。本稿ではAlternative Schoolのこのような性質を踏まえ、日本の学校外教育の在り方に示唆を与えるものとして、正規の学校の外に位置づく「学校外教育」として扱っていく。これらの事例において、集団活動がどのように取り入れられ、どのような役割を果たしているのかという側面に注目して検討を進める。

筆者は、2015年２月から３月にかけて調査対象の施設を訪問し資料収集を行った。これに加えて、施設の生徒、教師およびスタッフ等の関係者に対する聞き取りも行った。各事例の検討は、これらによって得られた情報をもとに行う。

## One Bright Ray Community High Schoolの事例

### 概要

One Bright Ray Community High School（以下、OBR）は、フィラデルフィア郊外（中心部から車で30分程度）に位置する。非営利団体であるOne Bright Ray Inc.によって運営されており、現在はフィラデルフィア市内に２つのキャンパスがある。OBRの使命は「フィラデルフィア市内のhigh-risk（ハイリスク：非行等の問題行動に引き込まれる危険が生活環境内に存在する）または、at-risk（アットリスク：非行等の問題行動に引き込まれる危険に直面している）な若者に対して補償的な教育プログラム（compensatory educational program）を提供すること」である。筆者が訪問したキャンパスは2004年に創設され、2015年３月現在で生徒数（16歳から21歳まで）は208名（他キャンパスに198名）、教職員は８名（他キャンパスに８名）である。さらに、OBRはフィラデルフィア市内に夜間開講（17時30分～21時30分）の大学（非常に小規模な日本の短期大学に類似したもの）を設置している[4)]。

多様な背景や問題の履歴をもつ生徒たちが集まるため、学校生活に関しては多くのルールが定められ厳格に適用されている。生徒はいかなる場合にも制服を着用しなければならない。制服を着崩すことは許されない。持ち物や言動についても詳細なルールが定められており、違反した場合には罰則が厳格に適用される。これらのルールと罰則はStudent / Parent Handbookに明記され、子どもとその保護者に対して入学前オリエンテーションで確実に伝達される。

### 学習内容

OBRの生徒は、退学等のために途中で諦めてしまった高校卒業を目指して入学する。卒業後、多くの生徒は就職を目指すが、大学や短大等への進学を目指す生徒も少なからずいる。OBRでは、表１に挙げた科目の単位をすべて修得することが卒業要件である。学期は前期と後期に分かれ、それぞれの学期に８週間のモジュールが二回り設定されている。生徒の多くは、修了までに２年から２年半をかけて学習している。

OBRでは、各授業の中にProject Based Learning（プロジェクト型学習）が多く取り入れられ、日常的に他者と協働して学ぶ機会が多い。また、生徒たちは、すべての授業の中で自分の考えをまとめ、クラスの他者に適切な話し方（in a professional way）で伝えることが求められる。カリキュラム担当者によれば、OBRのすべての授業は“connected to the real world”（生徒たちの実生活に関連し

**表１　OBR における学習内容**

| 【科目】 | 【必要単位数】 | 【科目】 | 【必要単位数】 |
|---|---|---|---|
| English（英語） | 4.0 | Physical Education（体育） | 1.0 |
| Math（数学） | 3.0 | Health（健康） | 0.5 |
| Science（理科） | 3.0 | Elective（選択科目） | 4.0 |
| Social Studies（社会） | 4.0 | Multi-disciplinary Senior Project | 必修 |
| World Language（世界の言語） | 2.0 | | |
| Art and Humanities（芸術と人間性） | 2.0 | 合計 | 23.5 |

（OBR の Student/Parent Handbook 2014-2015より抜粋）

ている）ことが求められている。OBR のカリキュラムは、生徒たちが自分の生活に深く関係する事がらについて他者と協働しながら学ぶようにデザインされている。また、生徒たちの“social life readiness”（実社会に出るための準備）を重視する観点から、実社会での仕事を単位に換算する仕組みもある[5)]。

**盛んな行事**

OBR では、Special Events と呼ばれる数々の行事が盛んに行われている。

Trips（85ers Club）、Field Trips

モジュールごとに、一定の優良な成績（例えば、85％以上の出席）を残した生徒に対して無償の小旅行が提供される。

Move Up Day

OBR の伝統行事とされている。中学校の学習内容を終え、高校段階の学習に進むことができた生徒を祝い、奨励する行事。

Zero Day

これも OBR の伝統行事とされている。各モジュールの最終日にこれまでの生徒の学習成果を祝う行事。

Graduation Ceremony

年に２回、１月と７月に行われる卒業式。リハーサルも入念に行われ、保護者も参加して盛大に実施される。

Annual Events

年に一度実施される様々な行事、Talent（才能）発掘（TV 番組をまねて歌やダンスを披露）コンテスト、３対３のバスケットボール大会、そして Prom（卒業記念ダンスパーティー）などが実施されている。これらの企画と運営のほとんどのプロセスに、優秀な成績を収めて選出された学生リーダーたちが携わる[6)]。

**集団活動の位置づけ**

OBR では、各授業の中に他者と関わりながら学ぶ機会が多く含まれ、学校行事も多く実施されている。だからといって、これまでの学習や生活面で困難な状況を抱えてきている生徒たちが入学当初から集団活動に適応するわけでは決してない。

OBR では、段階的に生徒たちが集団活動に適応できるように意図されている。たとえば、授業中に許可なく立ち歩くことは厳禁である。しかし、友人と口論などのトラブルになった場合に限っては、落ち着くために許可なくその場（教室）を離れて良いことが定められている（Walk Out Policy）。また、Conflict Resolutions（ケンカなどの問題解決）Program の実施や Circle Time（車座に座り、自分の自由な気持ちを伝え、周囲はそれを受け止めるということを通して self esteem（自尊心）の向上を図る活動）の日常的活用、そしてカウンセラーによる個別支援が行われている[7)]。

OBR には正規の学校で集団活動に適応できなかった経験をもつ生徒が多い。その中で、Project Based Learning という他者と関わらねばならない学習環境を提供しつつ、

いっぽうで段階的に集団活動に慣れさせていく仕組みを用意している。すなわち、OBRのカリキュラムの基本には、他者との関わりによる学習指導と、段階的に集団活動に慣れる生活指導の二つの側面が同時に位置づいている。

### Philadelphia Youth Build Charter School の事例

#### 概要

Philadelphia Youth Build Charter School（以下、PYB）は、フィラデルフィア市の中心部近く（中心部から車で10分程度）に位置する。PYB は「高等学校中退者に対して、コミュニティサービスを通して価値ある職業スキルを学びながら、卒業認定資格を得る機会を提供する」ことを目的としている。PYB は1992年に創設され、2015年３月現在で生徒数（18歳から21歳まで）は210人、教職員は20人（９人が教師、11人が職業指導員）である。生徒たちは２年間で卒業していく。卒業率は70～80％であり、同様の他の施設に比べてその割合は高い。多くの生徒は高校卒業の資格を満たして就職することを目指す。OBRの事例と同様に、ここでも大学や短大等への進学を目指す生徒も在籍している[8)]。

#### 学習内容

PYB では、表２に挙げた４教科のコアカリキュラムが設定されている。

**表２　PYB におけるコアカリキュラム**

| 教科 | 内容 |
|---|---|
| Mathematics | Basic Math, Pre-Algebra, Algebra and Geometry |
| RELA | Reading, English/Language Arts and Writing（総合英語） |
| Science（Exploration） | Physics, Chemistry and Biology |
| Integrated Humanities | Geography, Government, American History and Social Movements（総合人類学のようなもの） |

以上のコアカリキュラムに続いて、以下の教科も選択することになっている。
Computer Education、Academic Support、Career Development、Service Learning、Life Skills Class
（PYB の Annual Report 2012-2013から抜粋）

授業ではグループワークを多く用い、生徒たちにコミュニケーション能力を身につけさせることを意図している。また、プレゼンテーションの機会を多く用意して、他者と適切に（in a professional way）議論ができるような環境を整えている。筆者が訪問した日にも、ホールに50名ほどの生徒が集まり、自分史のプレゼンテーションが行われていた。各自800～1,200語程度の原稿を読み上げ、その後のフロアからの質問に答えていた。例えば、フロアから「原稿を書く時に最も大変だったことは？」と問われ、「忘れたい過去を思い出さなければならなかったことが辛かった」と答える生徒もいた。発表されていた内容は決して高い水準のものばかりではなかった。中には非常に素朴な内容のものもあった。しかし、生徒たちは大勢の他者に対して自分の言葉で気持ちを伝えるという、コミュニケーション能力を身につけるために重要な体験をしていた。このプレゼンテーションは RELA の授業であった。一つのクラスだけではなく、複数のクラスが合同でプレゼンテーションを行っていた。単に知識を学ばせるのではなく、他者との関わりを通してコミュニケーション能力を身につけようとする PYB の基本方針が表れている。

この方針は、PYB のスタッフ採用の際にも重視されている。採用担当の教員は、「教科の指導力が高くても、生徒とのコミュニケーションスキルと生徒を理解する力に長けていなければ採用することはない」と述べていた。

PYB では、すべての生徒が、入学時のオ

リエンテーション期間に行われる8日半のMental Toughness Trainingに参加しなければならない。ここでは生徒にコミュニケーションの基本スキルを身につけさせるための様々な体験的活動が実施される。入学時から段階的に他者と関わるスキルを身につけさせ、授業や後述の社会体験活動、サービスラーニングへと生徒を段階的に導いている。PYBでのすべての学習において、教職員と生徒、そして生徒同士のコミュニケーションが何よりも重視されている。

**AmeriCorpsとの連携によるService Learning（社会体験活動、サービスラーニング）**

PYBでの学びの特徴に、AmeriCorps（以降、AC）と連携した社会体験活動（Service Learning、サービスラーニング）がある。ACとは、アメリカの人々に社会活動の機会を提供して地域社会の様々な現状を改善することを目的とした連邦組織（Federal Agency）であるCNCS（Corporation for National and Community Service）が提供する中心的な事業である。そして、ACが行う事業の中に職業教育支援があり、PYBはこの部分でACと連携している[9)]。

PYBの生徒はすべて、入学するとACの非常勤メンバー（part-time member）となる。そして、PYB在籍中にACが提供する様々な地域支援サービス（community service）を行う。具体的なサービスは、老朽化した家屋の修理、病院や施設での高齢者等のケア、そして、学校等の公共施設の老朽化したコンピュータの修理等である。多くの場合、生徒は教室での授業を6週間程度受け、さらにACとしてのサービスを6週間程度行う。PYBには常勤のACスタッフが3名(調査時)おり、サービスのコーディネート、職業トレーニング、そして生徒に対する個別相談等を日常的に行っている。生徒たちは、ACのサービスに参加した時間数に応じて学費等の支援を受けている。

PYBは、ACと連携した社会体験活動を通して「実際の職業体験をなすことによって、生徒たちと地域社会を再び結びつける（reconnect youth to their communities through “doing”）」ことを意図している。さらに、「学校に行っていない若者に対して地域社会がもつ否定的な先入観を取り除く（remove negative stereotypes about out-of-school youth）」ことも目指している[10)]。

**集団活動の位置づけ**

PYBでは、PYBに関わるすべてのメンバーが家族のような関係性を築くことを目指し、強くつながり支え合う生徒文化（strong, supportive student culture）を生み出そうとしている。このために、生徒たちが互いを知りまた自分自身を知る（to get to know each other and themselves）ための、表3のように多様な課外の（extracurricular）集団活動を提供している。他のAlternative Schoolに比べ、PYBでは特に充実した活動が用意されている。これらの活動は、その目的と実施形態において、日本の特別活動と類似している。

**表3　PYBにおける課外の集団活動**

| |
|---|
| Youth Congress（生徒会）、Award Ceremonies（表彰式）、Student Activities（クラブ活動）、Committees and Events（委員会と行事）、Prom Committee（卒業ダンスパーティー委員会）、Yearbook Committee（卒業アルバム委員会）、School Picnic（遠足）、Thanksgiving Dinner、Break Activities（生徒同士の結びつきを強めるために行われるセッション間の余暇活動。ボーリング、ローラースケート、演劇鑑賞、博物館や史跡の訪問等が行われている。） |

## 3．米国の学校外教育における集団活動の役割

本稿では、Alternative School の事例を通して米国の学校外教育の実態について述べてきた。本節では、取り上げた事例の内容について、集団活動の役割に焦点化して整理する。集団活動は、生徒指導、学習指導、そして、学校に対する帰属意識の形成という３つの側面において重要な役割を果たしているものと考えることができる。具体的には、生徒指導場面において生徒たちに「なすべきこと」を、学習指導場面において「できること」、そして学校に対する帰属意識を形成する場面においては「なし遂げたこと」を自覚させるような仕組みが見て取れる。

### 生徒指導

生徒指導の側面における集団活動の役割は、まず、生徒たちに「なすべきこと」は何かを自覚させることにある。すなわち、生徒の目標を明確化し自覚させることである。OBR と PYB は共通に、入学時のオリエンテーションにおいて、Student Handbook にもとづいて明確なルールと罰則、卒業要件を提示する。とくに、ここのメンバーになるために遵守することが必要なルールの全てについて、生徒と保護者に理解させる。そして、「ここに来た目的（Why are you here?）」について自覚させる指導を一貫して行っている。この入口の指導において、生徒たちにここで何をすべきか、つまり「なすべきこと」を明確に理解させている[11)]。それぞれの指導の方法は異なる。OBR では生徒の状況に応じて、集団活動に不慣れな生徒に対してはスタッフによる個別サポートを行き届かせている。いっぽう PYB では、８日半の Mental Toughness Training に代表されるように、最初の段階から集団活動を通してコミュニケーションの基本的スキルトレーニングを行っている。ここには OBR の段階的に生徒を集団活動に移行させるねらいと、PYB の最初から生徒たちに集団活動を体験させていくというそれぞれのねらいの違いが反映されている。

### 学習指導

OBR と PYB に共通して、生徒同士が関わり合いながら協働する Project Based Learning（プロジェクト型学習）の授業が多く展開されている。当然、生徒たちには、プレゼンテーションやディベート等で授業の成果を発表する機会が頻繁に与えられている。また、授業での学習内容も、生徒の実生活や実社会と関連したものが選定されている。生徒たちは、自分たちの生活に密着した学習内容を、グループワークや他者との関わりを通して学んでいく。これは、生徒たちが社会に出るためには、まず他者と適切に関わっていくスキルを身につけなければならないという、OBR と PYB に共通の考え方にもとづいている。

この両者における授業は、生徒たちに様々な課題が「できること」を実感させるべく構成されている。教室では、生徒たちは他者との関わりを通して学習することが求められる。PYB では、基礎英語の授業（RELA）において、50名ほどの生徒を集めてプレゼンテーションを行っていた。内容の程度からすれば、わざわざ大人数を集めてプレゼンを行うまでもなく、一クラスの教室内で行っても良いと考えることができるかも知れない。しかし、PYB では生徒が自分の原稿を読み上げ、聞き手の生徒からの質問を受けて答える、という他者との関わりを重視した学習が行われている。いっぽう OBR では、授業の中にも段階的に集団活動に移行させるような工夫もみられる。例えば、Writing の授業の最終課題では、生徒自身が課題の形態をディベートとプレゼンテーションから選択できる

ようになっている。

PYB と OBR 共に、集団の中で他者との関わりを通して学ぶ機会が設けられている。PYB の特徴的な学びは、AC と連携して地域社会において行われる社会体験学習である。また、OBR においても、生徒たちが実社会で仕事をした場合に、それを単位化する仕組みが整っている。このように、段階的にコミュニケーションスキルを身につけた生徒たちは、実際の社会の中で様々な他者と関わりながら職業体験を行っている。生徒たちにとっては、入学時から学習を積み重ねて実社会で実際に職業体験を行うことで、「できること」の範囲が飛躍的に拡大することを実感する機会となっている。生徒たちは、集団の中で学ぶことを通して、自己の成長を自覚して、学習目標の達成感を適切に積み上げることができる。

**学校に対する帰属意識の形成**

PYB と OBR は共通して様々な生徒たちの活動や行事を重視している。こうした集団活動を通して、生徒たちに学校に対する帰属意識（membership）を形成することが意図されている。生徒たちは揃いの制服（OBR）やユニフォーム（PYB）を着用して生活する。学期の終了時には、必ず終了セレモニー（Move Up Day や Zero Day、そして Award Ceremonies 等）が行われる。それまでの生徒たちの努力と学習成果に対して教職員、保護者、そして生徒同士から賞賛が送られる機会である。また、学期中にも様々なイベントが用意され、生徒同士の関係性を深めていく機会を設けている。さらに、卒業の際には Prom や卒業式が盛大に行われ、生徒たちが卒業後の次のステップに進むことを祝福する。これらの行事は非常にフォーマルな形式で実施されている。卒業式では、生徒たちはガウンに身を包み、多くの保護者や地域住民に囲まれて祝福される。地域の新聞等のメディアも訪れ、後日の紙面に卒業式の様子や卒業生のインタビュー記事等が掲載されることもある。

PYB と OBR では、様々な行事を通して生徒の達成経験を積み上げて自己肯定感を高め、生徒の学校に対する帰属意識を形成させることを意図している。その中でも重要なのが、各学期の終了時に実施される各イベントである。これらのイベントでは、生徒たちの学期中の努力や学習成果に対して、様々な形で表彰するなどの承認と奨励が行われる。過去に成功体験や達成経験をもたない生徒に対して、彼（女）らの成長を承認、賞賛し、奨励することを公式行事の中で行うことは重要である。なぜならば、スモールステップ毎に公式に肯定的なフィードバックを繰り返すことで、生徒の達成感が積み上げられるからである。さらに、生徒たちは卒業に向けたプロジェクトや社会体験学習を集団で協働して進めていく経験を積み上げていく。そして、全ての課程修了者に対しては、Prom や卒業式を通して、彼(女)らの目標達成と次のステップでの活躍を盛大に祝福する。このように、PYB と OBR 共通に、集団活動は、生徒の自己肯定感を高め、学校に対する帰属意識を形成する役割を果たしている。

## ４．日本の学校外教育への示唆

最後に、本稿での事例検討の結果が日本の学校外教育に対してもたらす示唆について述べて研究のまとめとする。

本研究では、米国の正規学校外の教育機関（Alternative Schools）２校の事例を検討した。その結果、次の２点が明らかになった。

（１）米国の学校外教育においては、生徒による集団活動を基礎とした学習活動が積極的に行われていた。

（２）本稿が対象とした事例において、集団活動には次の３つの役割があった。それらは

すなわち、①生徒指導場面で、生徒に「ここ（OBR、PYB）に来た目標」を明確にして自覚させる役割、②学習指導場面で、生徒に自己の成長を自覚させ、達成感を適切に積み上げる役割、そして、③入学から卒業までの過程で様々に用意されている行事を通して、生徒の自己肯定感を高め、学校に対する帰属意識を形成する役割である。

米国における Alternative Schools 等の、正規の学校（traditional public schools）の外にある学校教育に関する研究は、その制度面や財政面の分析を行うものが中心であった。これに対して本稿では、Alternative Schools の実際の学習内容について明らかにしてきた。日本の学校教育の基盤に浸透している集団活動に注目して、それが Alternative Schools の事例において果たす役割を示したことに、本稿の特色がある。

集団活動は日本の学校教育のカリキュラム編成の基本原理として根付いている。不登校や学校不適応を経験している生徒たちは、学校教育が提供する集団活動になじめない場合が多い。日本においては、このような生徒たちに対する支援のあり方が定まっているわけではない。すなわち、従来の学校に戻すように支援すべきか、それともその逆か、支援者は場合に応じて独自に判断する他はない。

本稿が対象とした OBR や PYB には、様々な理由で正規の学校を退学（dropped out）した生徒が多く在籍している。生徒たちが抱えている問題も、日本の場合とは大きく異なっていることが多い。しかし、学校教育から一度それてしまった生徒たちに対してやり直しの機会を提供する場であるという意味で、OBR や PYB は日本のフリースクール等の学校外教育機関に対して示唆を与える。それはすなわち、集団活動を段階的に活用して、生徒の目的意識を明確にし、達成感を積み上げる、そして、生徒たちが学ぶ集団に帰属感をもたせるということである。既に日本においても、集団活動を基盤としたカリキュラムを提供している学校外教育の実践例がある。今後はこれらの日本での実践と米国の事例との比較を行い、日本の状況により適した集団活動の用い方について迫っていきたい。

## 付　記

本稿は平成26年度専修大学研究助成を受けた研究成果の一部である。

### 注

1）文部科学省、「小・中学校に通っていない義務教育段階の子供が通う民間の団体・施設に関する調査」、2015年８月５日

2）「教育委員会事業における企業・NPO 等との連携・協働に関する調査のお願い」http://www.shogai.nier.go.jp/gyoseichosa.html

3）赤星晋作、『学校・地域・大学のパートナーシップ―ウェスト・フィラデルフィア改善組織（WEPIC）の事例研究―』、学文社、2001年、65-74頁

4）筆者は、2015年２月19日に Philadelphia 市にある One Bright Ray Community Highschool の Fairhill キャンパスを訪問し、教職員と生徒に対する聞き取りを行った。また、One Bright Ray Community Highschool の HP も参照（2015年10月５日取得）。http://onebrightraycommunity.org/

5）One Bright Ray Fairhill キャンパスのカリキュラム担当者 Fisher 氏に対する聞き取りによる

6）筆者が訪問した際に、２名の生徒（男女１名ずつ）が施設を案内してくれた。この２名は成績優秀者として卒業を控えており、学生リーダーとして Prom の企画・運営を行っていた。

7）OBR では、すべての教職員が生徒の個別支援に関わる体制が整っている。筆者の訪問時には、廊下の警備員から Walk Out Policy の内容と実際の運用実態についての説明を受けた。

この警備員は、Walk Out Policy にしたがって教室から廊下に出てきた生徒を受け入れ、事情を聴く（intake）役割を担当していた。

8）筆者は、2015年３月26日に Philadelphia 市にある Youth Build Philly Charter School を訪問し、教職員と生徒に対する聞き取りを行った。また、Youth Build Philly の HP も参照（2015年10月５日取得）。http://www.youthbuildphilly.org/index.html

9）CNCS（Corporation for National and Community Services）の HP 参照（2015年10月５日取得）。http://www.nationalservice.gov/

10）PYB の HP（前掲）より

11）入学直後の生徒に対して目的意識を明確にする指導の重要性については、OBR と PYB のそれぞれの教員が共通に指摘していた。

## 参考文献

A. ダトナウ、S. ラスキー、S. ストリングフィールド、C. テッドリー著、後洋一訳、『格差社会　アメリカの学校改革』、明石書店、2009年

赤星晋作、『学校・地域・大学のパートナーシップ―ウェスト・フィラデルフィア改善組織（WEPIC）の事例研究―』、学文社、2001年

チェスター・E.・フィン Jr.、ブルーノ・V・マンノ、グレッグ・バネリック著、高野良一監訳、『チャータースクールの胎動　新しい公教育をめざして』、青木書店、2001年

堀真一郎、『きのくに子どもの村の教育―体験学習中心の自由学校の20年』、黎明書房、2013年

国際貿易投資研究所監修、『さまよえるアメリカの教育改革』、国際貿易投資研究所、2005年

三上和夫、湯田拓史、『地域教育の構想』、同時代社、2010年

箕浦康子、『地球市民を育てる教育』、岩波書店、1997年

大沼安史、『希望としてのチャータースクール　―学校を公設民営―』、本の泉社、2003年

高野良一、「コミュニティ・スクールとしてのチャータースクール　―チャータースクールの事例分析―」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要　第６号』、2009年、93-119頁

鵜浦　裕、『チャーター・スクール　アメリカ公教育における独立運動』、勁草書房、2001年

Youth Build Philly Charter School『Annual Report 2012-2013』